

---

# 幸せな時間

Happy Time

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸せな時間

### 【Nコード】

N4117A

### 【作者名】

Happy Time

### 【あらすじ】

お題「幸せな時間」色々な幸せな時間をお楽しみください。

猫と私と（涼風 すず）

「にゃん」

朝、飼い猫が甘えてきた。

私はそれに答えるように、猫の頭をなでる。

ゴロゴロ喉を鳴らして甘える猫は可愛い。

「あんた、そんなにまとわりついたら邪魔でしょ」

いくら可愛いからってもう起きなくては遅刻してしまう……

「にゃー」

猫は自由気ままだ。

もう起きなくてはいけないのに、布団に入りたがる。

「駄目だつて。もう起きるから」

猫は一向に諦める気配はない……

「駄目だつて。私がどいたらどうせ寝ないんだから」

そう、寝かせてあげても良いが、私が起きるとどうせ起きてしま  
うのだ。

「ふにゃー」

なんとも変な声をだすんだろう……そんなに入りたいの？

私は近くに置いてあった携帯を手に取り、時間を確認した。

「あ、何だ。今日、日曜じゃん」

うっかりしていた。今日、仕事は休みだ。

「にゃー」

まだゴロゴロ喉を鳴らして甘えてくる。

「はいはい。分かったから」

私は猫の頭をなでると、布団に入れてあげた。

猫は喉をゴロゴロ鳴らして寝始めた。

「もう、可愛いんだから」

クスツと笑って私はまた眠りについた。

猫はすごく温かくて、可愛くて、私に幸せな時間を与えてくれる。

そう、幸せな時間を与えてくれていた……

「またあの夢か……」

私はまだ忘れられずにいた。

今日からちょうど一年前に亡くなった愛猫マロンのことを。

「はぁ……」

深いため息をつき私は布団からでた。

「マロン……」

写真に写ったマロンは幸せそうに寝ていた。

マロンが居なくなってから週一回は必ずさっきの夢を見る。

そして、毎回写真に写ったマロンの姿を見ては涙する。

「あ、早くしなきゃ」

私はすぐに用意して仕事に出かけた。

マロンの一回忌の日にも私は仕事だ。本当に嫌になる。

本当に今日についてない日だ。

「はぁ……」

嫌々仕事を終わらせて帰る頃には外には雨が降っていた。

天気予報では今日は一日中天気が良いはずだ。

だから傘なんて持つてゐるはずもなく、びしょ濡れになって帰るしかない……

「ミヤーミヤー」

そんなときだった。

びしょ濡れになりながら走つてゐる私に一生懸命に子猫が鳴いてきた。

「……………どうしたの？ 迷子？」

私がそつと話しかけると、子猫はさらに鳴き始めた。

「ミヤーミヤー」

よく見ると子猫の横にはびしょびしょに濡れたダンボールが見えた。

「拾ってください……………」

私はゆっくりと書いてある文字を読んだ。

「捨て猫かあ……………」

「ミヤー」

しばらく考え込んだ私は決めた。

「これもなにかの縁かもね。私と一緒に住む？」

私は優しく笑いかけながら、子猫を抱いた。

それは凄く軽くて、冷たくて……………凄く凄く小さかった。

「一人で頑張つてたんだね……………」

いつの間にか涙が流れてきていた。

マロン……………私、この子と暮らしても良いかな？

もちろん、マロンの事は忘れないよ。

この子と暮らしたら、マロンの事を思い出す時間が幸せな時間に

なると思うんだ。

今はマロンの事を思い出すと凄く辛くて仕方ない。

マロンと過ごした時間は凄く幸せだったはずなのに、なのに思い出すと辛いんだ。

マロンとの思い出を幸せな思い出にしたいから……だから、この子と暮らしても恨まないでくれるよね？

私は子猫を抱いて、急いで家に向かって走り出した。

## 君の左手（詩斗）

僕の手のひらに今、大きな大きなシアワセが。

\* \* \* \* \*

「危ないっ」

最近の大寒波のせいで地元の道路はほぼ全てがつつるに凍ってしまった。

寒さに身を縮ませなければならぬ上にいつ車道から車が飛び出してくるのか、自転車は転ばないだろうか、そんなことを考えながら生活しなければならぬ不自由さというものを実感しているところだ。

けれどそんな風に注意しながら生活すること2ヶ月。

いくら例年は真冬だつて雪の降らない地域でも、2ヶ月もそんな生活をしていたらいい加減慣れる。多分この地域に住む誰もが、そろそろこんな生活にも慣れてきたはずだ。

と、僕は思っていたんだけど考え方が甘かったようで。

今日も学校帰りにさりげなく君は僕の隣を歩いている。

僕はそんな君の足元に、さほど大きくはないが小さくもない水溜りを発見した。もちろんこここのところの大寒波のおかげで表面は凍つて、太陽の光を反射してキラキラと光っている。

危ないって注意しようとした矢先に君は歩を進め、ツルリと足を滑らせた。

いつもならあんまり深く考えないけれど、こういう時は一緒に帰

っついてよかったと心底思う。こうやって、君を助けることができるんだから。

「大丈夫か？」

「あはは、またやっちゃった。ありがとゆうちゃん」

僕に左腕を捕まれて、身体を斜めに傾かせたまま君は笑う。若干顔を引きつらせていて、強がってるのが丸わかりだ。

きつとこれが他人だったら“また”ってところに呆れてしまうけれど、どうしてかな。相手が君だといっだってつられて笑ってしまっただ。

君が状態を整えてから、僕らはまた歩き出した。転びかけたことなんて君は全く気にしてなくて、すぐにいつものおしゃべりが始まる。

僕としても君の話の話を聞くのは好きだしとても楽しいんだけど、集中できない。やっぱり僕には“また”って言葉が気にかかるみたいだ。

君の話を右から左に聞き流す形で、少しの間、どうにかできないものかと考えたはじめた。

突然僕が相槌さえ打たなくなったものだから君は不審に思ったんだろう、僕の目の前にまわり込んで上目遣いに睨んでくる。

怒ったような表情の中にちよつとだけ不安が見え隠れしてるのが、可愛いなって思った。

「ゆうちゃん？ 聞いてますか」

「……ほら」

脈絡のない僕の言葉にさらに眉をよせる君。けれど僕の言葉の意味を理解するにつれて、顔を赤く染め上げていった。そしてそのまま氷のように固まった。



察しが悪いうえに相変わらずの恥ずかしがりだな。しばらく待たば溶け出すだろうとこれまでの経験を基にそう考え、僕はそのまましばらく待つことにする。

3分後、溶け始めると同時に君はうあうあとのわからない言葉でうめきだして、解読しようとしてもそれは僕には不可能なもの。うめき続ける君を今度は僕が不審に思っ眉をしかめる。すると突然真っ赤な君は、僕の差し出している手をひたたくって急ぎ足で歩き出した。

君と僕とじゃコンパスの差ってものがあるんだからもう少しゆっくり歩いて欲しいんだけど、目に付いた君の顔にその考えを引込める。

ちらりと見えた君の横顔は真っ赤。ゆでだこだって負けてしまうくらいに。前方だけを睨みつけて急ぎ足になるのは、君のわかりやすい照れ隠しだ。

いくら初めて手を繋ぐからってここまで恥ずかしがることがあるのかな。

確かに動機は君のため。けれど僕だって嬉しいんだ。嬉しすぎて恥ずかしさなんか感じないくらいには、ね。

次世代ミスター・ビーン。お調子者の君はそう評されている。

鉄仮面を被った舞姫。それが僕だそうだ。

こんなにも性格の違う、接点だってなかった僕らが付き合っているなんてそれこそまさに夢みたい。

僕からすればこんなシアワセを想像したことなんてない。これほどシアワセを感じたこともない。

いつまでも顔を真っ赤に染めあげて、それでも手をぎゅっと握り締めて離さない。右手に感じる温もりを、どう表せばいいのだろう。

君から受け取る大きなシアワセ。思わずにやけてしまいなながらも、僕はゆっくりかみ締めた。

## リーダーと愉快的仲間達（崎浜秀）

明日は卒業式だ。

楽しかった高校生活も終わりを告げようとしていた。

「あ〜っ。お前等とも、明日でさよならか……」

トーンの低い声で金髪の男がそう言った。身長は175cm位で、ちよっぴり細身の男。耳にはピアスが幾つかぶら下がっている。いかに、不良みたいな感じだ。

その男の周りには、数人の男が集まっているが、男と違い不良には見えない感じの奴らばかりだった。

眼鏡を掛け真面目そうな男に、体格のポツチャリと、いうかどちらかと言えばデブの男に、貧弱で何の取り得も無さそうな男。その他にも、数人といっても、10人位だがこの3人が一番男と親しく話をしていた。

9

「そう言えば、リーダーは告白しないんですか？」

野太い声の体格のポツチャリした男が、そう言って持っていたポテトチップを口に運ぶ。バリバリと音を立てているポツチャリした男を、睨み付けたリーダーと呼ばれた男は口を開く。

「お前、何言ってるんだ！」

「そうだよ。大輔。リーダーが告白しないわけないだろ」

少し生意気な声で、眼鏡を掛けた真面目そうな男が言った。それを、聞いた瞬間にリーダーと呼ばれた男は驚いた表情で、眼鏡を掛

けた男を見る。

何かを言おうとしたリーダーより先に、貧弱な男が笑いながら、弱々しい声で言う。

「そうですよ。学君まなみの言う通り、リーダーは逃げませんよ」

「そうかな？」

ポツチャリした男 大輔は見えない首を傾げて、ポテトチップをまた口に運ぶ。それに対し、周りにいる数名の男達の「告白するに決まってるだろ」とか、「そーだ、そーだ」などと声が飛び交っていた。

こうなってしまうば、もう告白をすと言う道しか選ぶ事は出来なかった。

「そうだ。学の言うとおりだ。俺が告白しないわけないだろ！」

強気な声でリーダーはそう言って笑うが、その顔は明らかに引きつっていた。実は、この男凄く弱気な性格で、マイナス思考の考えしか出来ない。見た目は不良っぽいが、きちつと授業に参加し真面目な男なのだ。

そんな弱気な性格の男が、告白なんて出来る訳がない。だが、意思が弱くすぐに周りの流れに、左右されてしまう。

「それじゃあ、早速行きましょうか？」

眼鏡を掛けた男 学がそう言わずれた眼鏡を元に戻す。その目は、何やら企んでいる様な目をしている。そんな事には、全く気付かず恐る恐るリーダーは口を開く。

「行ってくてどこにだ？」

「決まってるじゃないですか。告白にですよ」  
「!?!」

リーダーの質問に、期待に満ち溢れた声で貧弱な男が返答する。その言葉に驚き、リーダーは口から心臓が出そうになった。だが、そんなリーダーの事など無視して、他の仲間達は話を着々と進めていく。

「確か、公園で待ち合わせでしたよね？」

そう言ったのは貧弱な男だ。

「そつだよ。啓太君」

貧弱な男にそう言ったのは、眼鏡を掛けた男。学だ。リーダーよりも、リーダーシップを発揮する学は、話を進めて何も言わぬままのリーダーを、公園のすぐ近くまで連れて行く。多少頭がボーンとしていたリーダーに、眼鏡を掛けた学が声を掛けた。

「大丈夫ですか？ 告白の言葉は決まりましたか？」  
「……」

返事はないが学は気にせず、言葉を続ける。

「それでは、頑張ってください」

学はそう言ってリーダーの背中を一押しした。背中を押され、リーダーは公園の中へと入っていった。

頭が真っ白で、どこへ行ったらいいか分からず、リーダーはボン

ヤリと歩いていった。そんな様子を、塀の向こう側から見ている連中は、

「リーダー、大丈夫かな？」

野太い声のポツチャリ体系の大輔が、ハンバーガーを食べながら心配そうに言った。誰も大輔がどこからハンバーガーを出したか、気にせず話を進めた。

「多分、アレは無理かな？ 今頃、頭の中は真っ白だ」

諦めた様子の中で、眼鏡をあげながら学はそう言った。ここにいる全ての者が知っている。リーダーが見た目以上に弱気な性格だという事を。

「どうする？ あのままじゃあ、告白は失敗しちゃうよ。リーダーって、ガラスの心だから」

心配そうな声で、貧弱な体の啓太が言うと、周りの皆は頷いた。その時、女の子の悲鳴が聞こえた。

「キヤッ！ 止めて！」

その声のする方に目をやると、一人の女の子が10人位の不良に絡まれている。不良といっても、違う学校の不良だ。

「あの娘、確かリーダーの告白する……」

「あつ、本当だ。どうする？」

焦る啓太の言葉に、のんびりとした口調で大輔がそう言い、リー

ダーの方を見る。リーダーは離れた位置で、立ち尽くしている。暫く様子を伺っていたメンバーに、学が叫んだ。

「まずい！ 皆、僕等も行くぞ！」  
『オーツ！』

学達は、一斉に公園の中に走り出す。その瞬間、リーダーが叫びながら女の子に、絡む10人の不良に向かって行く。

「ウオオオオツ！」

その声に気付いた、不良の一人がリーダーの方を見て、笑いを含んだ声で言う。

「な、何だあいつ」

そう言った瞬間、リーダーの拳がその男の頬を殴り飛ばす。男の仲間は驚いた表情を見せるが、すぐに我にかえる。

「な！ 何だてめえ！」

女の腕を掴む男が、そう叫んでリーダーを睨み付ける。他のメンバーはリーダーを取り囲み指の骨を鳴らす。

「俺の学校の生徒に手を出してんじゃねえ！」

俯きながら、リーダーはゆっくりと言う。その声が聞こえなかったのか、男の仲間の一人が答える。

「はあ？ 何言ってるんだ？」

そう言いつた瞬間、男の右頬にリーダーの拳が飛んだ。殴り飛ばされた男はその場に倒れる。その瞬間に、周りの連中がリーダーに殴り掛かると、同時に学の声が響く。

「皆！ リーダーを止める！」

リーダーは殴り掛かる連中を、殴り飛ばしていく。リーダーの間数人が、リーダーを止めようとするが、それを振り切りリーダーは、女の子の腕を掴んでいた男に殴りかかった。一発、二発と浴びせていくリーダーの体を、抑え様とする学達だが、全くもって抑える事が出来ない。

「駄目だ！ 学！ もう、止められないぞ！」

「何としても止める！」

学は叫ぶが他校の連中は、リーダーを一発でも殴ろうと拳を出す。しかし、全て空を切り、リーダーの拳を逆に浴びていく。

実は、リーダーは弱気でガラスのハートだが、なぜか喧嘩だけは強い不思議な人物だった。その暴走するリーダーを止めたのは、彼女の一言だった。

「ちよ、ちよつとやめて！ 私の彼氏に何するの！」

この言葉に、一瞬にして辺りは静まり返った。リーダーは氷の様に固まった。そして、この時リーダーの失恋は決定した。

その後、学が相手と話し合い和解して、何事もなく事がすんだ。リーダーの失恋を除いては……。

「うっっ……」

「リーダー、泣いてるよ」

泣いているリーダーを見ながら、野太い声で大輔がそう言う。その手にはホットドックを持っていて、口をモゴモゴさせている。

「僕達、留年だって……」

「卒業式はお預けか……」

弱々しい啓太の声に、少し嬉しそうな声で学がそう言った。リーダーは失恋と留年と言う、ダブルパンチで立ち直れそうになかった。そのリーダーに、大輔がポテトチップの袋を差し出し言った。

「リーダー……。リーダーには、オラ達がついてるんだ。これでも、食べて泣き止むんだな」

泣いていたリーダーは、顔を上げて大輔の顔を見る。まさか、大輔が自分のお菓子を、人に渡すなんて思ってもみなかった皆は、驚きに目を丸くしている。

「お……お前だ……」

鼻声でリーダーはそう言って、皆の顔を見回す。そして、鼻を嚙りポテトチップの袋を取り、立ち上がり叫んだ。

「オウ。俺にはお前達が、ついてるんだ。また、高校生活を楽しむぞ！」

『オオオッ！』

周りの仲間達がリーダーの声に、そう叫んだ。学と啓太は顔を見合わせて、クスクスと笑い出す。そして、リーダーはポテトチップ



の袋に手を突っ込む。その瞬間に表情が曇り、横に座る大輔の方へと顔を向け、少し怒りの籠った声で言う。

「だ〜い〜す〜け〜！ てめえ、これクズだけじゃねえか！」

「だって、リーダーに食わせるの勿体無いじゃないか！」

野太い声で大輔はそう言って、見た目に似合わない素早い身のこなしで逃げ出した。

「逃がすな！ 皆で捕まえろ！」

『オーツ！』

こうして、リーダーは仲間と過ごす楽しく幸せな時間を、少し長く過ごす事が出来た。

## 夏休みになるまでに(槻弓)

夏休みまで2ヶ月を切ったある日。

俺は家の近くの公園で話をしていた。

「なあなあ、聞いてくれよ」

ソイツは俺の座ってる前でブランコに乗りながら言った。

「俺さあ、好きな人がいるんだけどさあ……………」

「そうか。んじゃあな。ガンバ」

「まてまてまてえ〜い!」

俺がベンチから立ち上がると、ソイツはブランコの上からジャンプした。

そして、残念ながら見事に着地した。

「なあ、相談に乗ってくれよ」

「ヤだ」

即答してやると、すぐに反応できずに鯉のように口をパクパクさせている。

「おいおい、少しは悩めよ!」

ソイツは俺の襟を掴んで激しく振る。

「お前はそれでも友達かあ!?!」

「まあ待て。話は聞いてやるからああああああ!」

待てと言った所から揺れを激しくしやがった。

…後で殴る

ソイツと俺は中学の頃に仲良くなったが、高校は別々の学校になった。

それでも、それから暇があれば一緒に遊んでいた。

ソイツの話によると、意中の人は同じ委員会なんだそうだ。

「へえ。なら問題ないじゃん」

「それがさあ……………」

普通に話ができるが、彼女に関する話題になると変に緊張し過ぎてしまうらしい。

「んじゃあさあ、お手つきかどうかもわからんの？」

「……ああ、そうなんだよ」

「……………」

「おおい！ 待ってくれよ！ お前だけが頼りなんだ！」  
今度は袖を掴んできた。

…そんな目で俺を見るな

「んなこと言われても、そんなのもわからんのじゃあねえ」

「じゃあよ！ わかったら相談、受けてくれるんだな！」

「一気にまくし立てるソイツに、ついでもってしまっ。」

「も、もちのろんだともワトソン君」

「わかった！ じゃな！」

それだけ言つて、ソイツは去っていった。

こうして俺は、一人公園に取り残された。

「……………っ！ そういえば」

慌てて時計を探す俺。

今日は楽しみにしていた『地獄少』の日だった。

やっこのことで時計を見つけ……

…時間を確認した

「……………次会つたら絶対に張り倒す」

数日後、俺は再びソイツと会った。

「彼女さ、今いないんだって！」

会つてそうそう、ソイツは廃テンションだった。

…ん。そろそろぶっ飛ばした方が近所のためかな？

「そうか。んじゃな」

「おいこらぁ！ 相談に乗ってくれるんだろ！」

話によると、委員会でちょっとした雑談があったらしい。

内容は、彼女・彼氏とのデート話。

その時、彼女がフリーだと公言したらしい。

「ならば仲良くなればいいわけだな」

ソイツは俺の言葉に大きく頷いた。

「全くその通り。で、どうする？」

「委員会の奴らと一緒に遊びに行けば？」

いきなり2人つきりは無理だろうと思つて提案してみたのだが……

「ええ〜」

と、なにやら不服な様子だ。

…殴るぞ

「……じゃあ、それがダメなら部活の大会にでも呼べば？」

それを聞いたソイツは肩をすくめて

「バカか？ そんなつまらん所に呼べるかあ？」

と、ハッキリと言ってしまった。

…うわぁい。ぶん殴つてやるう〜

だが、紳士な俺様はそんな気持ちを抑えて聞いてみた。

「そうか？ いいと思うが？」

「お前つて古臭い人間だよなあ。いまだに『きまぐれオレ ジロー

ド』とか『とき きトウナイト』、歌は『光 ENJI』だもんな、

しょうがないかあ！ はっはっはっ！」

俺達の周囲の気温が2度ほど下がった。

ような気がした。

「……なあ」

「うん？ どつたのセンセイ？」

「一度、死んでみる？」

大会の数日前、またソイツと会った。  
前回よりもテンションが上がっていて、今にも道頓堀川に飛び込み  
そうだ。

…俺、もう、相手するのが疲れたよパト ッシユ

「いやあ、運が向いてきたでしかし！」

…某死んだ漫才師の人かお前

ソイツ曰わく、彼女が大会へ応援に来るそうだ。

まあ、もちろん友達を引き連れてだろうが。

ソイツはとにかく上機嫌で、勝手に色々喋ってくれた。

まあ、楽ではあるが、今日の俺には…

始めはまだ頭の上にあった太陽が、いつの間にか頭の横辺りになっ  
ていた。

「……さて、そろそろ用事があるから帰るわ」

いつもは向こうから話を切り上げるが、今日は俺から切り上げたの  
で意外に思ったようだ。

「おう？ そうか、悪かったな」

…やっと気付いたか

「今日は何の日だったっけ？」

「100d+」

「ああ、あれね」

題名を聞くとソイツは顔をしかめた。

以前に一緒に見たとき『この時間帯で流すやつじゃないだろお！？』  
と言っていた。

「そ、それよりも！ 大会頑張れよ」

また、そう叫びそうだったので先手を打っておく。

「なあに、大丈夫さ。彼女にいい所見せなきゃな！」

単純なソイツは、笑顔でそう言った。

そして、上機嫌なソイツは、俺が見えなくなるまで笑顔で手を振っ  
ていた。

その夜、夢でうなされたのは黙っておこう。

夏休みまで後1ヶ月を過ぎた。

ちなみに、大会は毎月の始めにある。

ソイツは大会でトップ3になったと聞いた。

しかし、会った時、不覚にも開いた口が塞がらなかった。

「ど、どうしたの？」

「…だつて、泣いてるんだもん。」

「…だつて、泣いてるんだもん。」

「…だつて、泣いてるんだもん。」

「…だつて、泣いてるんだもん。」

「…だつて、泣いてるんだもん。」

「ウン、ワカツタ。お前はただのバカやね」

泣いていた理由。

それはただの寝不足だった。

「酷いなあ、ふわあああ」

大会後、電話番号をみんなで交換したのだが、その後、電話をしよ  
うかずつと悩んでいただけらしい。

「そんなの簡単なことだ。三分クッキングの三十分の一で解決でき  
るぜ？」

その言葉にソイツは勢いよく顔を上げる。

「ほ、本当か!？」

その顔は、薫にでもすがりたいような感じが伝わってくる。

「ああ、それはだなあ……」

「それはあ!？」

俺は胸を張って言った。

「電話しろ」

ーバキッ

…俺の目の前は真っ暗になった

「いかん、始まる」

今日はIG Xだ。

これはOPがかっこいいランキング上位の作品だ。

ちなみに、この前見逃した『地獄少』もランキングしている。

俺の中ではオスカーやゴールデングローブ以上の価値があゝ……………！

と、一人で議論していると……

ピロロロロ〜

「……………」

…誰だよ！ 電話なんてかけてくる奴は！

と思いつつも電話にでる俺様ってエライなあ。

ピッ

「はい、もしも……」

「ようー！」

ピッ

「さあてと、見るかなあ」

TVに向き直ると、残念ながらOPは終わってしまったようだ。

が、HDDに取ってあるから問題無し。

ピロロロロ〜

「……………」

ピッ

「いきなり切るなよ！」

「うるせええ！ こっちはなあ……………！」

「…悪かった」

20分の激論の末に、俺は勝利を収めていた。

「わかりやぁいいんだよ、わかりやぁよ」

「……はぁ」

心なしか疲れているみたいだ。

「で、何のようだ？」

電話からは、心底疲れたような声が返ってきた。

「あのかなぁ……」

こんな話だった。

彼女から買い物に付き合っただけと頼まれたこと。

そして……

「告白ねえ……」

告白のタイミングについてだった。

さつきは適当な時にしたらいいと言ってしまった。

……まあ、特に心配しないでもいいかな

軽い後悔の念に浸りながら、俺はコップを片づけ自分の部屋に戻った。

ちなみに、電話が終わった時には別の番組の流れていた。

そして今日、俺は学校が終わったその足で公園に向かった。

まだお昼真っ只中。

木陰になっっているベンチに座っているのに、早くも汗だらけになっ  
てしまった。

蝉の声がこの暑さに拍車をかけているようだ。

「お〜い」

「ん？」

公園の入口辺りから声を掛けてくる影。



その影は汗だくになりながらも、走って近いてくる。

「わりく、待たせたな」

あまり反省の色が見えないセリフだ。

「ん、悪い」

そんな俺の軽口を無視して話を進める。

「やっと夏休みだな」

「やっと夏休みだよ」

不意に沈黙が降りた。

お互いの呼吸音と、蝉の声だけが取り残されたように。

しばらくして、その沈黙を破ったのは俺だった。

「……今回の夏は何する？」

「……今回は、やめとく」

「……そっか」

昨日、電話があった。

さりげなく？

告白したら、彼女の方もさりげなくOKしたそうだ。

その時、俺は嬉しかった。

そして、ちよっぴり寂しくなった。

もう、あまり遊べなくなってしまうのだろうか。

だが、それでも嬉しかった。

「………帰る」

俺は、憎たらしく輝く太陽を、目を細めながら見上げ、ベンチから腰を上げた。

それに続くように立ち上がる気配がする。

「……おい、永井守」

歩き始めた俺を呼び止める声。

「………ありがとよ」

それだけ呟くと、気配はどんどん遠ざかっていく。

俺は振り向き、その背中が遠くなった所で呟いた。

「おめでとう、柴原慶次」

子供達が公園になだれ込んでくる。

この子供達も学校が終わったのだらう。

俺は子供達の明るい声を聞きながら、遠回りをして帰った。

この夏は……

まだ始まったばかりだ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4117a/>

---

幸せな時間

2010年11月8日09時23分発行